



TITLE:

心のモジュール説による幼児期の
<心の理解>の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

子安, 増生

CITATION:

子安, 増生. 心のモジュール説による幼児期の<心の理解>の研究. 京都大学, 1997, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202368>

RIGHT:

氏 名	こ 子 安 ます 増 お 生
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 72 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	心のモジュール説による幼児期の＜心の理解＞の研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 坂 野 登 教 授 齋 藤 久 美 子 教 授 山 中 康 裕

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「自分自身や他者の心の表象の内容を推測すること」と定義される＜心の理解＞には、心の仕組みを構成するモジュールが必要であるという立場から、その変化が特に顕著な3歳から6歳の幼児期に、モジュールがどのように発達するのかを、6つの発達心理学実験及び理論的検討を通して解明しようとする試みである。本論文でのモジュールとは、「ある装置やシステムを構成する要素で、他の要素とは区別可能であり、かつそれ自体が独立して機能するもの」という意味である。その基本的な考えは、Fodor (1983) の心のモジュール説に発するが、論者は Gardner (1983) の多重知能の理論をベースにして、①言語的知能、②音楽的知能、③論理—数学的知能、④空間的知能、⑤身体—運動的知能、⑥対人的知能、⑦個人内知能の7つの相対的に独立した知能が7つの六角形の形で隣接するというモデルを仮定し、他者の＜心の理解＞に必要なモジュール（対人的知能と個人内知能）の発達過程を解明しようとした（第1章）。

第2章では、空間的知能と他者の心の理解の関係についての、文献的、理論的考察が行われ、他者の視覚表象を推測する視点取得と自己中心性の問題を、Piaget & Inhelder (1948) の「3つの山問題」の研究の成果と問題点についてまとめ、一つの認知過程モデルが提案された。第3章は、第2章の検討から浮かび上がってきた問題点の実験的検討に当てられている。そこでは、カメラとビデオカメラという2種類の映像機器を用いて、他者視点からの視覚表象をカメラの映像を通してフィードバックすることの効果が検討された。その結果、前後の自己中心性は4歳までなお見られるが、左右の自己中心性は4歳から6歳の期間を通じて一般的に見られること、またフィードバックの効果については、カメラの映像を見せられるだけよりも、実験者が誤りを指摘し、子ども自身に訂正させる条件の方が正答数が高いことがわかった。

これまで問題にしてきた視点取得研究では、視点取得が真に他者表象の推測なのか、単に自己表象の変換にすぎないのかの、区別がつきにくいという難点があった。ここで、Premack & Woodruff (1978) の提言によって開始された「心の理論」研究を、心の表象の理解についての新しい研究領域を開拓したものとして論者は注目した。第4章では、「心の理論」による4つの研究分野を紹介し、特にメタ表象的な心

の理解に注目した。第5章では、「心の理論」の発達を調べるための主要な3つの課題である、「誤った信念課題」「スマーティ課題」「写真課題」を取り上げ、他者の心という表象、自己の心という表象、写真表象という3つの表象について実験的に検討した。その結果、心の表象の理解が難しいのは、表象一般の問題ではなく、「心」という表象に固有の問題があることが示された。

第6章では、社会的知能に関する文献的展望を通しての、対人的知能のモジュールの解明には、基礎的研究が必要であるという認識の下に、交互交代の現象の検討の重要性が指摘された。第7章では、二人でおもちゃで遊ぶ共同遊びにおける交互交代ルールの成立と、誤った信念課題で測られた「心の理論」の獲得との関係が実験的に検討され、両者の間の一定の関係の存在が示唆された。第8章では、「心のモジュール説」で残された問題である、モジュール同士の関係について検討された。発達のエンジンとなりうるモジュールの候補として言語的知能が上げられ、その中でもメタファーやアナロジーの役割の重要性が指摘された。メタファーやアナロジーは、新しい思想や表現を生み出す「創発 emergence」の機能をもっているだけでなく、話し手の意図を聞き手が推論しなければならないという点から、他者の心の理解の問題と密接に結びついている。しかし幼児期の言語能力は、まだ発達途上にあることを考えると、発達のエンジンはむしろ、事物の中にいつも新たな関連性を見いだそうとするメタファー化の能力にあるのかもしれないと論者は結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心のモジュール説の考え方を有力な仮説として認める立場に立って、7つの知能モジュールの中の対人的知能、個人内知能、及び空間的知能の幼児期における発達過程を、理論的、実験的に解明しようとしたものである。心のモジュール説とはもともと、Fodorがかつての能力心理学を、コンピュータ科学の成果などを参考にして発展させて提起した考え方であって、心理学の方法論にかかわる問題提起であり、特に脳モデルとの関係では神経心理学の領域にも大きな影響を与えている。

ところで論者の心のモジュール説は、脳モデルとは直接的には関連づけられていず、あくまでも心理学的水準のものであるが、それはある意味では大胆な提起であり、それだけに批判される余地を残している。

本論文は、第1章で論者の心のモジュール説の提起を行い、本論文で検討すべき問題点を明らかにした後に、次の章からは、個々のモジュールと関係深いと考えられる発達心理学の研究領域の理論的検討を行い、次いで実験的検討を行うという構成になっている。本論文で注目される第1の特徴は、理論編に相当する章において、関連する諸研究を綿密に検討・整理し、相互の関連性を明らかにする際に見られる理論的検討の水準の高さにある。例えばいわゆる3つの山問題や、それに関連する視点取得についての内外の研究は莫大な量に達するが、論者はそれらの諸研究を要因別に整理し、その上でこれらの要因を位置づける一つの認知モデルを提案するに至っている。その分析と総合の能力は高く評価できるものであり、その高さはいわゆる「心の理論」の紹介と理論的検討の中にもあらわれている。さらには、視点取得の研究と「心の理論」研究とを、〈心の理解〉の研究として統一的にとらえようとした論者の洞察力も、高く評価できる。

本論文の第2の特徴は、上記の理論的検討に基づいた実験を計画し、実施しているという理論と実験の

対応づけにある。いくつかの章に見られる複数の実験には、一貫性と発展性が見られ説得的である。論者の洞察力は、最後の第8章における、個々のモジュールを結びつけ、また発達のエンジンとなる可能性をもったものとして、メタファーやアナロジーのはたらきを考えた点にある。発達のエンジンは言語そのものというよりはむしろ、事物の中にいつも新たな関連物を見いだそうとする、メタファー化の能力にあるのかもしれないとする論者の構想が、今後認知発達研究の様々な分野を結びつけ、新たな研究テーマを開拓する潜在力となるかどうかは、論者の今後の研究にかかっている部分が大きい。

他方本論文は、その構想が大きいだけに問題点も散見される。論者は7つの相対的に独立した知能を、六角形の形で隣接する「ヘプタ＝ヘキサゴン・モデル」として構成しているが、それぞれの知能の構成概念としての必然性、或いは空間的な位置づけに関してはまだ不確かな部分のあることは否めない。また「心の理論」が欠如しているものとして、自閉症児をとらえるような考えの問題点、或いは「心の理論」という用語上の問題点の指摘もあった。しかしこのような指摘された問題点については論者も十分に自覚しているのであって、むしろ大胆な提案に付随的な事柄として、理解すべき面かもしれない。

まとめるならば、本論文の理論的高さと展開力、そして行われた実験の綿密さは高く評価できるものであり、今後は、本論文で展開されたモデルの妥当性を、検証していく地道な努力が望まれるところである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年2月25日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。